

日付のある雑詠と随想

海蝶夢話

卷の七

二〇二二年

谷川
修



詩人三好達治の文章に、「すべての風雅がそうであるように、∴、ともすればすぐとそれなりのマンネリズムに墮する」というのがあった。この言葉は、ただ習慣のようになって続いているわたしの雑詠を厳しく批判することになる。わたしは、詩人の次のような言葉に活路を見出すほかない。「詩歌の面白さなどというものも、∴、精神の躍動、生命感の手応え、その程度や多寡や品質に関している∴」、「詩歌の鑑賞ということも、実は人間の心の歴史を読むことに外ならない」、そして、「結局して詩歌の趣味風味というものも、それが人生と相互する分量の多寡にかかっている。またその品質の上下にかかっている∴」などに。つまり、詩歌にかかわって言われている後半の文を、どれだけ心がけているかということの問題にするのだ。しかし、こちらの方はいっそう困難な仕事である。すでに翅の衰えた蝶は、舵手として渡ろうとする海原で、試行錯誤して迷路を進む以上に知恵ある制御を学んだらうか。ただ眼の前の海を見つめている。

一月五日

世の中の事を知るために、M・ヴェーバーの『支配の社会学』を読んだ。その慧眼は、社会の支配現象のおよそ考えられるあらゆる側面に及んで、的確な概念で切り分けて見事に描き出す。付随的な見解まで切れ味が鋭い。わたしが小さな組織で立ち向かわなければならなかった支配はこれだった、と思いがたるところもある。この書物のあとに、ナチスやスターリンの異常な支配があり、アメリカ合州国の世界覇権があったわけだけれど、ヴェーバーだったらそれらをどのように記述しただろうか。大いに限界をもつ人間とその社会は、二十一世紀になっても、『支配の社会学』の考察した諸相から質的に変化しているようには見えない。現代のグローバル金融資本主義——ヨーロッパの首相がかつて「カジノ資本主義」と表現した——の支配の構造も、その考察からあまりはずれてはいないだろう。また、情報化時代の支配も射程外にあるのではないだろう。

おりから、現代の一つの見本的な政治と社会の動きが、オハイオ州で始まった長い政治ショーで観察できる。二十一世紀のアメリカ大統領選挙にも、百年前の「演説の内容はますます付随的な重要性しかもたなくなってくる。けだし、演説の効果は、…、純情緒的なものであり、政党のデモやお祭りと同様な意味しかもたないからである」という見方がよく成り立つ。

この皮肉に聞こえる書きぶりを嘲笑的な見方と捉えてはいけない。ヴェーバーは社会の進展を望んだのだ。われわれはその考察から学ばなければならぬ。現代の社会学者ウォーラス

ティンは二〇一二年年頭のコメントで、世界改革の運動について、短期的には今困窮している人々の痛みを最小化すべきこと、その取り組み方は国々で異なるだろうこと、長期的には、五年か十年の内に改革運動の分裂を克服できなければ、——資本家のシステムが崩壊してどんなシステムになるにしても——次の二十年—四十年の戦いで勝てないだろう、と論じている。世界システム論を展開した人の予想する年数のうちに、資本主義的体制が崩壊することになるのだろうか。残念ながら、わたしにはそれを見届ける時間が残っていない。

ヴェーバーの「支配の学」を読み解いて目の前の世を腑分けして見る

一月七日

冬の野にまだ花としてススキに陽

閉塞の世の街に出て物見する田夫はどうに遺棄された者

遺棄された老夫はしかしこの都市を見透かすだけの眼持つ者

一月十二日

凍えつつ『リチャード三世』読んで待つ

ストープが二、三台あるだけの体育館で時間をつぶすために買ったシェイクスピアのこの作品は、二十六、七歳の頃の作という。訳者の評言に引かれて、やはり円熟の作品ではないよう

に感じる。人の知る歴史に題材をとっているから、プロットを自在に変えることができないということがあるのかもしれない。こちらの態勢もよくなかったので、語られる言葉につかまえられることが少なかった。

リチャード三世を悪逆非道に描くことで劇を鮮明にするためだったが、シェイクスピアほどの大家も、現王朝に大義名分を与える書きぶりになっている。新王朝の二代目の時代にも、ロンドン塔で王妃が処刑され、トマス・モアのような賢人まで刑場に果てるということが起きたのだから、その子のエリザベス一世の時代を生きたシェイクスピアに、もつと違う書き方はむづかしかつたらう。大当たりをとることになった芝居は、ばら戦争に対する後世の見方に強い影響を与えたと思われる。

そもそも歴史上、血なまぐさい闘争によって王位を獲得した王朝で書かれたものは、倒された王をよくは書かないものだ。東アジアには殷の紂王の事例がある。紂王を討った周の武王の弟の旦は、甥の王位を篡奪せず助けて周王朝を強固なものにしたので、のちに聖人と尊敬されるようになった。しかし、イギリスに『史記』があつてリチャードが読んでいたら兄の死に際しての篡奪はなかった、と言うこともできない。一夫一婦制のキリスト教を受け入れたヨーロッパとは違って、異腹の王子の多かつた中国では、兄弟を恐れなければならず、兄弟殺しによつて王位を手に入れた者も多い。甥殺しには永樂帝がいる。ところが彼は名分を巧みに立て、三代目として明の全盛期を築いた。悲劇にはむかない。

動乱が長く続けば人々は戦いに倦む。それを終息させた新王は自然と前王よりもよく見られることになる。そちらの側から見ると、ユグノー戦争の渦中でフランスのアンリ四世は、隣国のばら戦争をよく学習して、ヘンリー七世の跡を追っている。ブルボン朝もチューダー朝のように、王家の血筋の傍系から出て王位に就いた。しかも前王朝の娘を娶っている。それはどこでも、王位継承の正統性を補強する手段であった。支配の心理学は現代でも奇妙なものである。いつそ易姓革命の思想の方が合理的と言える。

戯曲を読んだあとの連想がとりとめもなく広がってしまった。本朝にも古くから王位継承の闘争があつたが、言及することはやめておこう。二十五年も前にストラトフォード・アポン・エーボンのロイヤル・シェイクスピア劇場で、後ろは壁の最後列の遠い座席から、言葉を理解できないままに、『リチャード三世』の一幕を観たことを思い出す。

一月十六日

「重大な発言」

娑婆との境にいる

何かがぐるぐる回っている

地獄と極楽の境目が見える

今ここはどこか

今日だめになつたら、明日は葬式じゃー。

・
・
・
・
・
・
・

こちらの話にはみな受け答えできるし、手はまだしっかり動いて握手できる。なかなか立派な状態だ。肺炎が治まると、重病とはいえ、また元気

一月十七日

「問いかけ」

人間はどんなところに生まれて、
生き物たちの中でどんな位置にあつて、

人間と呼ばれる者になつてから、

どんな道を歩んできて、

どんな人間関係をつくりだし、

どんな社会ができて、

ひとりひとはどんな生き方をしてきて、

今のようになつたのだろうか。

これからどんな生き方ができるだろうか。

一月二十四日

十分も陽に舞う雪にただ見入る

無念無想にまだ遠いけど

池の上板の花台にバラの花無数の雪に黄色を守る

一月二十七日

老舵手が天狼仰ぎ進む舟

灯も一つ人も独りで寒の海

夕闇の降りてくる冬の世界へ、小舟が出て行く。舵手である漁師は、前人未踏の領域へ乗り出したN・ウィーナーとでも言えるだろうか。この大海原に海図はないから、天狼星はわたしの進むべき進路を教えてください。思考船には、自己を灯とせよ、という励みだけがある

一月三十日

降り積もる時を浚渫する船が新たな航路わたしに開く

二月八日

峻巖を教える雪の峠道

二月十二日

ジャガイモを土に捧げて命を待つ

(再生を期すジャガイモを切る)

春探し船首めぐらす大船

二月十六日

整然と若木を植えた山があるまだ肌寒い野の向こう側

二月十八日

機会があつて、『最後の舞い』というインド映画を観た。古典舞踏カカリの名手の演じる神に魅入られた女性と、役者との物語。独立まもない頃で、まだ地方の王族や家来などのいる社会。インドの富と貧困が背景に映し出される映像も優れていて、物語は現実を離れることがない。役者が歩かず、手と眼がすべてを表現するカタカリという舞踏を、初めて知った。俳優が見事に演じ、印象深い映画だ。短い案内文は、すばらしい緊張感ある傑作とほめている。誇張ではない。

外に出ると、この地方に一年に一度か二度しかないような大雪。降りしきる雪を見ながら歩いて、映画をふりかえる。

白頭にインドの熱を冷ます雪

春の雪余韻を残す口に入る

二月十九日

海原にまだ冬の風鶉の肩に

二月二十一日 母子して春を始める里の庭

(子は小学生だった)

二月二十二日 水仙を友とし歩むかたつむり

投資顧問会社の二千億円ぐらいあるはずの預け入れ金が、二千億円近く不明だと言うので、調査が入った。初期の調査で、ここ二・三年投資の形跡がないらしい。リーマン・ショックより前には投資していたのかどうかまだ分からない。ほとんど詐欺事件のように聞こえる。失われたお金は企業年金の積みたて金だという。年金支払いに影響が出るだろう。巨額なので、誰も疑わなかったのだろうか。考えてみれば、現代の金融資本主義全体がほとんど詐欺的で、この事件とはつきり区別できるだろうか。

別の記事は、通信を千分の一秒速くするために、数百億円かけてシンガポールまで海底ケーブルを施設していることを教える。今は、資金の出し入れの操作をコンピュータがする。一瞬の差が利益を左右するというのだ。資金運用会社は、各取引所にコンピュータを配置して、遅れを取らないようにするのだという。ある投資会社は、運用資金の三十パーセントの利益を上げていくそうだ。とんでもない経済の仕組みではないか。コンピュータはプログラムで動く。そんなプログラムを許す金融取引がおかしいのだ。経世済民の代わりに、人間を忘れたゲームが行なわれている。資本主義が断末魔の悲鳴をあげているときに、危機は深まらざるをえない。

実際に、製造企業が悲鳴をあげている。日本の大手電機会社が生き残りをかけて合併して、運営していた半導体製造会社が破産の申請をした。負債は四千数百万円。このニュースは、日本にとつてささいなニュースではない。衰退が一つ一つ眼の前で起きている。

二月二十九日 紙のけた障子に春の海とろり

三月二日

わかめ刈り藻くずとなつた八十の海人探す舟内海荒れる

内海の奥のこちらの方まで探す小舟がいる。このあたりで昔の漁師は自分を「おま」と呼んでいたけれど、あれは海人のことだったのだろうか。

三月六日

リュウキンが池打つ春の風を吸う

春雨や岩に染み出る猿の顔

三月七日

家内が姉とあさり貝を少し掘ってきた。まだ小さい。海水を汲みにテトラポッドに降りてみたら、絶えたかと思っていたわかめがあった。でも、ここのはまだずいぶん小さい。こちらも今年の寒さのせいだろうか。梅も

つぼみを開いたのは数輪だし、沈丁花もわずか。あせびは、冬の初めからのつぼみがまだ動き出さない。宵に、期待して外に出てみたが、如月十五日の月はほとんど雲に隠されている。寒の戻りがまだあるだろうという。

妻の獲たあさりに春の海を汲む

三月八日

日をつくり椎茸を採り花を折り荒野に在った人を幻視す

載せる地は善悪すべて棄てず在る人は必ず多難に生きる

弁舌の世に孤独な死、月おぼろ

三月十一日

おっばんを投げ入れる海寒戻る

三月十二日

弔いに薄雪と梅峠道

人生は一駄の教か、一卷の書物とするか
究極の生死の二字をあふれ出るもの

今日明日を限りの命果てた人、今日また新た満天の星

三月二十四日

孫たちに昔話を読み聞かせ自ら涙「雉もなかつば…」

三月二十九日

「まだ死なん」と病床の人、花の時季

四月二日

衰えを身に引き受けて花を見る

四月三日

台風並みの低気圧が日本海に発生して大風。幸いここは西寄りの風で被害はない。昨日からの天気予報を見て、台風のように発生したものの経過を追うのではないのに、低気圧の発達をこれほど正確に予測できることに感心した。コンピュータの性能とシミュレーション・コードの精度は進んでいる。それに対して、人事は、……

狂歌

国中が春の嵐に立ち騒ぐ国難すでに長く静かに

四月五日

水仙を荒れ田に植える世に生きる

四月六日

身を勞す浦の苦屋の花に月
野の面で春風と化せ身と心

四月八日

『太平記』を読んでいるが、まだ、岩波書店日本古典文学大系の分冊一を終わったばかり。『平家物語』ほどの文章の堅実さや、作品としての品格はないと思うけれど、やはりおもしろい。鎌倉幕府が亡んだときの、人間たちの動きが少し分かった。物知りの作者は、類似する話題に移って、中国や日本の物語をずいぶん長くさしはさんだりする。勾踐や菅原道真のことなど、初めて聞く別伝もある。物の怪・怨霊が出て、加持祈祷の効き目が語られる。作者や京都の人々の精神の習慣を表わしているのだろうか。実にたくさんの事件が語られるから、うかがい知ることのできるころがある、とも言える。大佛次郎が、『天皇の世紀』を執筆している頃の父宛ての手紙に、太平記のようなものを書いていと書いたのは、そういう点だろう。その言葉がわたしに『太平記』を読む気にさせた。もちろん、時代を隔てた作品の質は違う。大佛は、個人でよくもあそこまで出来たと思うほど資料を集めて読み、しかも大した力量であれだけ長い文章にまとめた。

それにしても、大きな時代の変わり目を見てきて、わたしの世紀はもう一つの「太平記」を書くべき時代だ、と思う。

『太平記』読んで見まがう眼の前の遷移する世の人のうごめき

四月十四日

わらび摘み生を楽しむ日を延ばす

四月二十六日

磁場を出て風光る場へ歩み入る

日を長く藤と風とが睦みあう

NHKの「クローズアップ現代」が、正規社員が退職できないように、耳を疑う抑圧を受けていることを取り上げていた。低賃金で従順に働く労働者が辞めようとすると、損害賠償の請求をすると脅かすことまであるという。日本の社会はそれほど荒んできた。今日一日の報道を見るだけでも、病は重いと思う。人々はそれを見ず、気を紛らす大小の話題だけを追う。

四月二十八日

ひと時の有縁の一会春暮れる

(日中の老若男女四人の再会)

四月二十九日

ハナミズキ咲く首都の街物見する

わが足が踏む土地の値にたじろぎつこの国の今見定めている

衰退の兆候は目に見えているけれども、この社会のつくり出ししている有形・無形の構造は大きくて、今日明日には危機的になるとも見えないから、われわれは日常的な営みを続けている。

車窓行く幻影に似る灯が啓示している色即空と

四月三十日

酒精欠く酒添える齋、楊貴館

五月二日

いのち一つ引き止め緑湧く大地

九死に一生を得るといふできごとを眼の前に見た。

五月七日

永らえて思源の池に迷い蝶

花落ちる楠の並木を行く遊子この場所と時自ら選ぶ

五月九日

悠境と彫った石碑とそばに立つメタセコイアを見つつ朝食

黄山に登るために中国に來たのに、風邪を引いて断念。熱はまもなく引いたけれど、あまり働かない頭が仙境にさまよわせ、日が過ぎる。

五月二十九日

時に遅れ遅い代掻き実り期す

(わたしはそれを傍観している)

五月三十日

虹を立て庭いつくしむ日をつくる

水の玉青蓮の葉をころがる音

六月二日

身と心遊戯となつて孫踊る

六月四日

梅雨の陽を栗よぶどうと分かち合え

六月七日

市内油谷の東後畑に棚田の夕景を見に行く。三脚に望遠レンズ付きのカメラを据えて待つ人が二十人余り。わたしは、映像の代わりに一首、二句。

栗匂う丘でカメラが整列し柵田と海に照る夕陽待つ

船過る波紋は金色夏入日

漁火や柵田に落とす水の音

六月十二日

初夏、身を勞す無用の用に
静宵、心を放ち息を整えて遊ぶ

ある文章に誘われて、三好達治の『諷詠十二月』を読んだ。日本の詩歌の特徴とその変遷を、要領よく知ることができた。復古の気分の高まった戦争中の文章の調子は古い。もっと新しい言葉づかいで詩を書いた人も、伝統の調子になじんでいたらしく、その散文は多様な言葉を縦横に使って流麗だ。けれども、今の新世代から見れば、現代の感覚から遠く、擬古文と思うかもしれない。そう考えてみると、現代でも短歌や俳句は、なお古さを帯びた言葉や感覚に根をおろしたものだ。変化してきた現代の精神と言葉から生まれる詩歌が必要なのだ、と思う。しかし、本物の詩人ではな

六月十五日

い者にはむつかしいから、ほかのことで日を過ごすうちにふと口をついて出る、古い形式の歌や句を書きとめるしか能がない。というわけで、読んだことのない日本人の漢詩にふれて、はじめに記したような対句ができた。なんと古い感覚でしょう。

野に戯れて体を動かせば、

歌う者がある。何の歌だろうか、

歌うのはわたしか、それとも…。

初夏の野にももの皆動く思議超えて

六月十九日

台風に蜘蛛うずくまる書架のかけ

六月二十五日

大海に金欄の魚送り出す

死魚容れて海は静まる梅雨晴れ間

六月二十八日

夢覚めて物語する臯月闇

月日期しクチナシ一杖土に挿す

「再びトンボに会う」

トンボよ、歳をとったわたしの

暮らしぶりを巡察に来たか。

わたしはこのとおり元気だ。

そう、気は充実している、歳相応に。

今日は暑くなった。しかし、

今年の夏を乗り切れるだろう。

緑陰にすこしのことはできるだろう、

眼は弱くなつたが、君の複眼の働きに倣い。

海は凪いでいる。

蝶にすぎないわたしも、広い海を

渡るすべをすこしは知った。
鷗ほどではなくとも飛んでいけるだろう。
トンボよ。

七月六日

海満たす水空覆い蝉惑う

七月八日

人形と黒衣の顔と胆くらべ

七月九日

蓮の葉の蠶螂の子と会釈する

七月十一日

蠶螂の斧で「歴史」を書きつけて午後は剪定、ただ一日を整序している

同族の棘ある者を剪定して、すこし柔和になったけれど、せわしなく作業する気短さは治らない。今日、テレビのドラマで関羽が死んだ。

『太平記』では高氏が死んだ。離合集散、変節極まりない人々の動きは、あきれるほど。これを室町時代と習って、どうにか落ち着いた時代と
思っただ。物語を太平記と名づけた人物は大したものだ。

天下は世界に広がり、球形になった天の下で、田夫は何事もないかのよう
に日を送っている。この国で、海の向こうで、球の反対側で、何事も
起きていないかのよう。

七月十六日

雨上がり鏡の海を急ぐ蝶

七月十七日

カッターの声梅雨を逐い夕陽照る

カッターの右舷の者の力勝つ鏡のような夕暮れの海

七月二十日

大船の名はWISDOM凝視する

七月二十一日

草に汗自然と語る山の墓

七月二十三日

今年たった一つの花を開いたくちなしの木に

蝉が薄衣を脱ぎ掛けて行き、

力強く夏の歌を歌う

青蓮の華と並んで立つてそれを聴く
思えばこの青蓮は母とゆかりがあつた
わたしも何か歌うべきだろうか。

青蓮の華と並んで身体を感じ心を観察し事象を観察す

七月二十六日

何もかも人工の堂ただ一人の御しえぬゲームの行方

八月二日

閑窓にまれ人來たり趣味もよく飽くまで語り夏の夜更ける

八月七日

立秋、浦上美術館へ「龍泉窯青磁展」を観に行く。

心頭を宋の青磁に溶かし込む

究極の形と色の創る美を死すべき者が対峙して観る

海風が窯変をする時に会う

八月十日

出漁の船音乗せる夕風にこうべを垂れて今日の日送る

経世済民という理念が空語になった社会が苦しんでいる。機能しなくなった政府をなりふり構わず動かすために、滅裂した政治集団が寄り集まる情勢になった。普遍性を欠いた古い観念が、共通項になって命脈を保とうとしている。また世界の動きから遅れることになるのだろうか。実につらい。

八月十一日

墓掃除に行った。いったん伐った木々のあとに、若木が成長を始めている。つつじは一本が枯れたけれど、もう一本は二十数日ぶりの今日の雨で生き返るだろう。背の高くなりすぎた桜の下に、実生の若木が二本出ている。植えた紅白の萩はみな生きています。藪椿の若木も何本かある。しきみに似た若木もある。供えたしきみの実生だろうか。いつか、花の下に、また、春と秋には花々に囲まれてあるだろうことは確実だ。時が経てば藪に埋もれるとしても。

原子力発電所の事故の起きた福島県で、百数十匹の蝶を採取して調べたところ、放射線を浴びた影響が観察されたという。形態に変化が表われていて、それらの蝶を交配して生まれた子や孫にも障害が表われたそうだ。放射線で遺伝子が変化したのだ。予想されたことが起きている。インドの人が空と表現した世界は、虚ろな幻影ではない。空なる世界は、なにかしらモノ

が関係をとり結び、それらのモノも関係も変化しながら、コトが展開していく。

百日紅を楽しみ海へ向かう蝶

この海はちっぽけだが、わたしの宇宙だ。

八月十三日

睡蓮が生涯を為す石の臼

(姫睡蓮が花開く小さな世界)

八月十七日

沈む陽が光を投げる浜で食う

(日本の渚百選の浜)

海原に遠く漁火天と地と

波音を聞いて一夜を仮寝する

八月二十二日

お祭りが果て咳と痰、養生す

(孫二人が帰って行った)

八月二十三日

エアコンを止めてヤスデが線となる

八月二十六日

浄水機倦まず水吐く秋旱

秋の夜の蝶の羽ばたき全天へ

見えも聞こえないそのゆらぎを感じよ、と若い禅師が説く。

九月四日

想念が眠りから覚め彷徨し自己のあるべき姿を探す

咳残し季節は移り百舌鳥の声

クチナシを食う青虫に降る秋雨は、夏負けに倦んだ老夫に癒しを恵む

九月六日

弦鳴らす月を見上げて虫が和す

経済界と労働界の代表たちがそろって記者会見。国会の機能を回復してほしい、と要望した。この国の誰もが思っていること。民主党と自民党の党首選を控えての動きは、状況の深刻さを教える。サラリーマン的な議員たちが、誰がどういうグループが次の選挙で主導権をにぎるか見極められず、浮動している。オポチュニストも機会をねらう。経済は警鐘を鳴らし続けて

いる。政治が流動化して、大きく動き出す危機的な状態だ。人間の普遍的な価値を話題にする政治家はいない。不自由な社会に向かい、暗い時代を迎えるのだろうか。

九月八日

石見美術館へ「巨匠たちの英国水彩画展」を観に行った。マンチェスター大学ウィットワース美術館所蔵の、十八・十九世紀のたくさんの水彩画。画風の変遷はイギリスの歴史を反映しているし、絵画が表現を極めさらに変化を求めて展開することを教える。しろうと眼にも、ターナーの絵の特徴がある程度分かる。景観を描写して、雲の移ろう空と、降りそそぐ光と風景を反射する水面に及んでいる。描き尽してやがて、画面に空気が奥行深く広がり、形を溶かして色彩のヴァリエーションに近づく。

海岸沿いの国道を通って、益田へ初めてのドライブ。柿本神社に寄った。

人麻呂を偲ぶ神社によすが無くただ誦受して時超える歌

鴨島の沈む海見て鳴く千鳥

九月十八日

留守居して紅白の萩瓶に挿す

九月二十日

新畳掃いて秋の陽招き入れ

新畳匂う茶室の軸に柿

たこ焼きの売り声のする浦の秋

かげろうのはかなさを食う女郎蜘蛛

九月二十三日

秋の陽が木を登る蟹染め上げる

九月二十四日

野の菊をまた草分けになつて刈る

草分けが残して進む彼岸花

中村元の『日本人の思惟方法』に次のような言葉があつた。―日本の歌集の中から「自然」を詠じたものを除いたならば、あとにどれだけが残るであろうか。俳句も自然界の風物から切りはなしては考えられない―。まことに、わたしの詩歌のようなものと同じことをしてみたら、

いつたいどれだけ残るのだろう。それは、現象世界をそのまま肯定して受け入れる日本人の態度からきている、と。日本の詩歌は、「自然の象徴化」にすぎないか。

十月一日 猪の残してくれた栗拾う

月光に浸して癒す身と心
(中秋十六夜、月齢十五)

月隠れ地も暗む宙独り立つ

十月四日 法座だと告げる五色の旗過ぎて野良で田夫が聴き入る密語

作務終えてターナーの眼で空を見る

体を動かしているあいだ中、『日本人の思惟方法』のことが頭に浮かんで消える。疑問に思うところもある。一つの社会の中にいて、共通の特徴をとり出せたとしても、原因となったことを特定するのは困難なことだと。歴史や社会についてもっている一般的な知識から原因を特定しては誤ることがないだろうか。むしろ、見出した特徴の否定的な面をどのように克服す

ればよいかを説くことの方が有益なのではないか：などと、浅学は不遜なことを考えてしまう。碩学中村元さんの言葉をもっと考えて見なければならぬだろう。ところで、インド・日本・中国の仏教を深く考察し、宗教を「目に見えないものに対する尊敬の念であり、人間の本源に対する自覚である」ととらえた仏教学者は、無神論者ラッセルの「自由人の信仰」のような考え方をどう判断していたのだろうか。

十月二十二日　　しわ深い大芋の顔撫でて視る

十月二十三日　　つわぶきと陽に湯あみする病み上がり

十月二十五日

英国「エコノミスト」誌の協力者たちが予測する『二〇五〇年の世界』を読んだ。日本人にはつらい未来が予測されているのだけれど、現在直面している困難や中期的にそれと格闘しなければならぬ人々の苦しみを気にしなければ、長期的に楽観できるといふのだろうか。悲観ばかりしてはいけませんが、今日と明日の困難を克服することが人間の為すべきことだ。自分は今となくと眺めていられる立場にいて未来を予測していることは許されない。

十月二十八日

長いすでただ海を見る老僧と会釈を交わす浦の夕暮れ

十月三十一日

「迷語」

海に向こうの山の上に、赤銅色の月が出た。気がついたらいつの間にかそこにあつて、静かに世界を照らしている。世界がそこにあるのに、わたしは、昨日は人との折衝で疲れたけれど、今日は少し落ち着いた気分だ、などと考えている。やつと、若い哲学者が、生死のことを説いているのを思い出す。価値の根源であるところの主体は人間だろうか、と。円かな月の光の照らして示す空が真理で、おまえはそれを体現しているか、と。わたしは、自分では考えをめぐらすこともできなくて、何も映し出さない円い鏡を見つめて、一時のくらいである生の中にあり、もう一つのくらいと、二つながらのくらいとを知らずにぼんやりと立っていて、赤銅色の光の波が身心をわずかに染めてくれるのを待っている。

十一月二日

内海にただ朝霧が立ち上る見つめる者の姿消え失せ

十一月七日

秋の萩、古萩を染めた百の秋

(萩美術館、江戸時代陶器展)

冬立つ日海見る丘で鰺を食う

十一月八日

秋深し鶉の息長く海ぬめる

一つ竿でサヨリとアジを釣る呂尚

十一月九日―十五日

現し世の願いを固化し横たわり光を拒むミイラの眼窩

顧みて拙く生きた一生を不壊の眼窩に結像させよ

大楠が揺れて教える去った年

名工が光と影を晶化して人というもの露わに描く

老兵の舐めた悲惨が人となる沈着な眼とか細い顎と

万物を育む法の慈光射す心のはずむ少女の顔に

町に行くことがあって、「大英博物館エジプト展」を美術館で、「ベルリン国立美術館展」を博物館で観た。わたしに印象が強くないのは既に視ていたせいだけど、七歳の子もミイラにそれほど動じなかった。美術展の方は、評価の高い作品に「再生」を始めたヨーロッパの強靱さが結晶している。さらに二日続けて川端康成原作の古い映画を観て、今回の滞在はさながら文化週間のよう。「雪国」は、一九六五年の大庭秀雄監督の作品で、主演が岩下志麻と木村功。

「山の音」は、一九五四年の成瀬巳喜男監督、原節子と山村総主演の作品。

映画は、人を文芸の生みだす世界に連れて行く。トンネルの向こうは、東京の中産階級の知識人と縁の薄い世界。そこには知識はないけれど考えながら生きている庶民がいる。置かれた社会での条件が人間の運命としてあり、そこで生きる人間に人生が生起する、という人間の基本条件を作家は巧みに描いているのだ。高度経済成長期の真ただ中で映像化された一九三〇年代後半の日本は、戦争にのめり込んでいく時代で町でも村でも出征する兵士が背景に映し出される。そのとき少数だがはつきりした中産階級があったことが分かる。「山の音」は、その中間の敗戦間もない時代をすぐあとに映画化したもの。そこでも、中産階級の家が材題だ。心中の格闘が淡々とした行動の背後にある。映画「雪国」のつくられた六十年代まで、運命に制約される人間のあり方と、生活の安定した人間の考え方やゆるやかな行為を理解できる人々

がいたのだ。まだテレビがあらゆるドラマを試すことをしていなかった時代、こういうドラマを観るために映画館に足を運ぶ観客がいた。経済成長によって一億総中流とはやされた時期を過ぎ、すでに衰退に向かう今、中産階級とその文化は拡散して見えなくなってしまう。二十一世紀、こういう文学作品もまれになり、映像を使うドラマも異質なものにならなくなった。生活の条件を見せず、まるでのっぺらぼうな社会にあるかのように、さまざまなドラマの中で人間は特異な個性としてだけふるまう。

こんなことを考えたのは、携行していた書物で、インドの中産階級と認めるA・ロイという女流作家が、自国の政治と社会の問題を鋭く批判しているのを読んだせいである。インドほどいくつもの深刻な矛盾を抱えた社会ではないとしても、日本は理想社会に達したのではないから、以前にあった問題がなくなったわけではない。人生を重層的に見ることを忘れてはいけないと思う。

十一月十九日　ガザからは悲惨な戦火伝えられここで無残に壊死する政治

十一月二十一日　旧友と小春の海を見て話す

十一月二十三日　年重ね自生の菊の継ぐ命

十一月二十五日 再生を雑念の枝切つて待つ

木槿や百日紅などの枝が乱雑に伸びたのを剪定し、『本』を手に取ると、『眼蔵』をよむが最終回だった。あしかけ九年も、若い二人の禪師の説くところを聴いてきたのだ。それが終わるといので身を顧みれば、雑然としてそのじつ空虚があるのみ。どのように身心を持して行じればよいか、という問いが依然としてある。

十一月二十七日 木枯らしや消え去る思想はびこる世

十一月二十八日 人間が三年暮らし汚染した皮肉を削いで脱落を期す

冬の宵海はいぶした銀色でハミングをして天と地と在る

十二月四日 小春陽が色とりどりに戯れて静かに響く時刻む音

厨房で糸一筋に身をまかせ空腹満たす天の時待つ

十二月五日

無花果と菊と余生を共にする

我が海に潮目一筋今日の出来事

十二月九日

雪の舞う小さな池に迷いこむ舟の上にはアザレアが咲く

十二月十四日

駅でまく餅を拾って道を継ぎ暮れの街道老夫婦行く

十二月二十二日

身上の記録をすべて見失いたただ残菊に暮れの雨降る

十二月二十三日

白骨が開示している生と死を

(有縁の人の骨を拾う)

十二月二十四日

睡蓮の世界を覆い氷張る水晶の宮胎蔵界よ

十二月三十一日

大過なく一年が過ぎ大みそか陽の降らす雪この身をすすぐ

二〇一三年 正月
白江庵 謹製



『太平記』卷第二、
鎌倉幕府の命で斬られた後醍醐
天皇の側近二人の辞世、

日野資朝

五蘊仮ニ形ヲ成シ

四大今空ニ帰ス

首ヲモツテ白刃ニ当ツ

截断ス一陣ノ風

藤原俊基

古来一句

死モ無ク生モ無シ

万里雲尽キテ

長江水清シ

